
見よう見真似で

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見よう見真似で

【Nコード】

N5928U

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

矢吹大次郎は野茂英雄に憧れその投球フォームを真似ていた。やがて野茂を本気で目指すようになり。野球ものです。

第一章

見よう見真似で

矢吹大次郎はだ。中学で野球をしている。

彼のポジションはピッチャーだ。そして憧れている選手はというと。

「あんたその選手好きねえ」

「全くだな」

両親が呆れた顔で言う。彼は今家の中でその選手の投球フォームを真似ているのだ。その選手はというと。

「もう引退したじゃない」

「野茂か」

「そうだよ。引退してもね」

それでもまだとだ。彼は身体を思いきり捻った投球フォームをしなからだ。そのうえで自分の親に話すのである。

「好きだよ」

「好きだから？」

「それで投球フォームもか」

「そうだよ。第二の野茂さんになるんだ」

彼は強い声で言った。

「絶対にね」

「やれやれね」

「じゃあ将来は大リーガーか」

「そうなるよ。本当にね」

その夢も話すのだった。その彼はだ。

小学校から野球をしていてリトルリーグでもピッチャーだった。

そして今の中学校では野球部という訳だ。とにかく野球一筋である。

それと共に野茂一筋なのだ。とにかく彼は野茂が好きだった。

「いや、本当に凄いピッチャーだったよね」

「ああんりたいよね」

こうだ。クラスメイトや部員達にも笑顔で話すのだった。勿論打球フォームはトルネードである。それで投げる球はどうかというのだ。

「速いな」

顧問の先生もだ。真顔で認めることだった。

「そのボールはいい」

「有り難うございます」

「後はコントロールだ」

それも何とかしろというのもだ。先生は言い忘れていなかった。

「いいな、コントロールもだ」

「それでもなんですね」

「御前の投球フォームだとそれが難しい」

フォームが大きくしかも顔がキャッチャーから離れやすい。それでコントロールを定めにくいのだ。トルネード投法の欠点と言われている。

「それも何とかしろ」

「わかりました」

彼は先生の言葉に素直に頷いた。その彼にだ。

先生はだ。こう話した。

「野茂だつてな」

「野茂さんですか」

「最初はとんでもないコントロールだった」

それだ。あまりにも有名だった。

「けれどそれが次第にだ」

「よくなっていったんですね」

「だからだ。頼むぞ」

こう大次郎に話した。

「コントロールもな」

「わかりました。それじゃあ」

「スピードとコントロールは両立させないと駄目だ」

ピッチャーとしてだ。よく言われていることだった。

「さもないと何にもならない」

「ですね。それは本当に」

「そうした意味で野茂になるんだ」

コントロールも含めてだというのだ。

「完成された野茂にな」

「完成ですか？」

「そうだ、完成だ」

あくまでだ。それだというのである。

「ただ物真似をしているわけじゃないだろう？御前も」

「はい、そうです」

それはだ。まさにその通りだった。

彼もただ野茂の真似をしているだけではないのだ。野茂が素晴らしいピッチャーだと思っているからこそ、彼の様になりたいと思っているからこそだ。

そのピッチングフォームで投げているのだ。ピッチャーとしてだ。

「凄いピッチャーですから」

「じゃあ御前も凄くなれ」

先生は確かな声で彼に告げた。

「いいな」

「ええ、それじゃあ」

こうしてだった。彼はスピードに加えてコントロールも身に付けていった。彼は忽ちのうちに中学生では知らぬ者のない程のピッチャーになった。

第二章

勝って勝って勝ち続けてだ。その結果だ。

高校でもだ。彼は活躍した。今度は野茂そのままにだ。フォークを身に着けた。そのフォークは最早高校生のもものではなかった。

「お、おい」

「こんなフォークあるのか？」

「高校生のフォークじゃないぞ」

「あれは」

試合を観た誰もがだ。驚いて言うのだった。

「何十センチ落ちたんだ？」

「村田兆治みたいだな」

「それか杉下茂か」

どちらもフォークを決め球とした名投手である。

「いや、むしろ」

「そうだな、あれはまさに」

「野茂だな」

やはりだ。彼だというのである。

「野茂英雄だな」

「そこまでいつてるよな」

「高校生なのにな」

「しかもな」

彼はそれだけではなかった。フォークだけではだ。

「カーブもあるしな」

「だよな。野茂は後でカーブも覚えたんだよな」

「それと同じだよな」

「そうだな」

こう話されるのだった。そうした意味でだ。

「まさに野茂だな」

「ああ、完璧な野茂だよ」

「いい意味でな」

こうした評価だった。彼はまさに野茂二世だった。彼は甲子園でも投げる。投げて投げてだ。遂には野茂がしなかったこと、甲子園で優勝投手になる、それを果したのであった。

だが、だ。彼はだ。このことについてこう言うのだった。

「甲子園で優勝できたのは嬉しいです」

「それはか」

「やっぱり嬉しいんだね」

「はい、ですが」

それでもまだというのである。彼は。

「まだ野茂さんの域には達していません」

「まだっていつのかい？」

「甲子園で優勝したのに」

「それでもかい」

「野茂さんは。もっと凄いピッチャーでした」

その野茂はだ。今の彼以上だというのである。

「ですから」

「それでなんだ」

「まだっていつのかい」

「甲子園で優勝しても」

「甲子園で優勝して終わりだとは思わないんだね」

「終わりじゃないです」

まさにだ。その通りだというのである。

「まだこれから」

「じゃあ。まだ」

「プロに行つて活躍するかい？」

「それとも大学かな」

「どっちかな」

「どっちにも行かないです」

だが、だった。彼はだ。

ここではこう言った。淡々としているが確かな声だった。

「僕が行くのは」

「何処なんだい？まさかと思うけれど」

「大リーグかい？」

プロでも大学でもないとするのだ。

最早考えられるのはそこしかなかった。後はだ。

「アメリカに行くのかい」

「そうするっていうんだね」

「そうです」

まさにだ。その通りだというのである。

「僕はアメリカに行きます」

「そうか、本当に野茂みたいになるんだね」

「そしてアメリカで戦う」

「そうするんだね」

「そうです。そしてアメリカで」

その国でだというのだ。野球の本場、野茂が戦ったその国でだ。

第三章

「アメリカで戦います、野茂さんみたいに」

「それかい、そうするんだね」

「それでなのかい」

「そこで野球を」

「そうしますから」

こう言っただ。彼はプロ野球も大学も経ずしてだ。そのまま大リーグを目指すのだった。既に彼のことはアメリカでも知られていた。そしてだ。三年の夏、優勝した後でだった。

彼にだ。スカウトが来て日本語で話すのだった。

「我がチームに来てくれるね」

「アメリカにですネ」

「最初は3Aだけけれど」

それでもまだというのだ。

「アメリカに。来るかい？」

「はい」

笑顔で頷く彼だった。

「そうさせてもらいます。そして」

「そして？」

「俺、やりますから」

強い声での言葉だった。

「絶対に大リーグにあがります」

「ほほお、自信は？」

「ないから最初から話を受けません」

そうだとだ。やはり強い声で言うのだった。

「絶対にやりますから」

「頼もしいな。どうやら君は」

「俺は？」

「このままいくと超えるかもな」

スカウトは楽しげに笑ってだ。こう彼に話した。

「あの彼をな」

「野茂さんですか」

「そうだ、超えるかもな」

こう彼に言うのであった。そしてだ。

大次郎はアメリカに渡った。彼にとって3Aなぞ何でもなかった。すぐに昇格し一年目からメジャーで活躍した高卒でいきなりメジャーということにアメリカだけでなく祖国も騒然となった。これはだ。

「野茂だつてな」

「ああ、高卒でいきなりなんてな」

「そんなのなかったのにな」

「凄いな、こりゃ」

「ああ、凄いなんてものじゃないぞ」

「怪物だ」

この言葉が彼にかけられた。

第四章

「まさに怪物だよ」

「かもな。あれはな」

「甲子園だけじゃないのか」

「とことん凄い奴みたいだな」

「こつ話すのだった。そしてだ。」

彼のピッチングはだ。アメリカではこつ呼ばれたのだった。

「第二の野茂だな」

「ああ、トルネードの再来だな」

「日本から来た第二のトルネード」

「まさにそれだよ」

これが彼のアメリカでの評価だった。その彼はだ。

メジャーで活躍し続けそこで二百勝も達成した。野茂の記録である二〇三勝にも届いた。だが彼はその時にこつ言うのだった。

「俺は野茂さんがいたからです」

「野茂が？」

「野茂がいたからだっていうのか」

「はい、野茂さんがいたからです」

彼がいたからこそだと。アメリカの記者達に話すのだった。

「こつして野球をやってピッチャーになって」

「そしてアメリカにいてだな」

「ここまでなれたっていうんだな」

「野茂さんは憧れです」

彼にとつてはだ。まさにそれだというのだ。

「その野茂さんがいなくなったら」

「そつか。そつ言うんだな」

「彼がいたからか」

「野茂がいてこそなんだな」

「そうです。俺は飲もさんがいてこそなんです
そしてだった。彼の言葉は。」

「俺は見よう見真似でここまで来られました」

「じゃあ野茂より劣る？」

「そう言うのかい？」

「勝っているとか超えたとかは思えません」

「それはだ。決してだというのだ。」

「ですがそれでもです」

「それでも？」

「それでもっていうと？」

「野茂さんに限りなく近付くことはできると思います」

「それはできるかも知れないというのである。」

「ですからこれからでもです」

「投げていく」

「そうするのかい」

「記録の問題じゃないです」

「野茂の通産勝利数に並んだことについても話すのだった。」

「俺にとって野茂さんはです」

「ああ、わかったぞ」

「記者の一人がここで言った。顎鬚の記者だ。」

「永遠の目標なんだな」

「その通りです。永遠の目標です」

「まさにそれだと話すのだった。そうしてだ。」

「彼はそれからも投げ続けた。常に野茂を目標にしてだ。その彼が引退したその時にはだ。こう言った。」

「野茂さんがです。大リーグに挑戦してくれたからこそ俺はここまで来られました」

「彼は最後まで野茂を見て目指していたのだった。それが矢吹大次郎であった。彼にとって野茂英雄はだ。永遠の存在だったのだ。」

見よう見真似で

完

2
0
1
1
・
3
・
2
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5928u/>

見よう見真似で

2011年7月4日03時11分発行